

# アルザスにおける言語の現状とその地域性

三木 一彦\*

## La situation actuelle et les caractéristiques régionales des langues en Alsace

Kazuhiko MIKI

### はじめに

ヨーロッパで用いられている言語の大半を占めるインド＝ヨーロッパ諸語は、ラテン（ロマンス）系・ゲルマン系・スラヴ系の3つに大別される。このうち、西ヨーロッパでは、ラテン系（イタリア語・フランス語・スペイ

ン語など）とゲルマン系（ドイツ語・英語（厳密に言えば、イギリス語ないしイングランド語）・オランダ語など）の言語が卓越している。言語名と国名が一致していることから明らかなように、上記の言語はそれぞれの国家における公用語とされている場合が一般的である。逆にいえば、とくに近代以降における国民国家の統合原理の重要な柱の一つが、

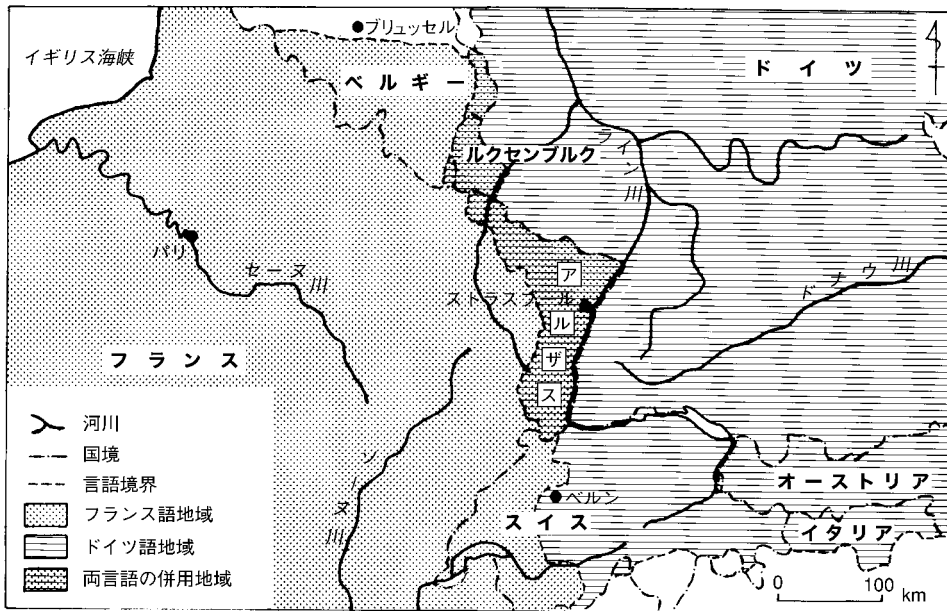


図1 対象地域図（Office Régional du Bilinguismeの資料による）

\* みき かずひこ 文教大学教育学部

これらの言語であったといえよう。

しかし、これらの言語の境界と国境は、必ずしも一致するとは限らず、その顕著な例がベルギーとスイスにみられる。ベルギーでは、ゲルマン系オランダ語のフラマン語とラテン系フランス語のワロン語が二大言語であり（他にドイツ語も公用語）、スイスでは、ゲルマン系のドイツ語とラテン系のフランス語・イタリア語・レートロマン語（ロマンシュ語）の4つが公用語とされている。この両国における言語問題の存在はつとに知られるところである。

本報告でとりあげるフランスのアルザス地方は<sup>1)</sup>、フランスとドイツというヨーロッパの大国の狭間にあり、言語的には長らくドイツ語（アルザス語<sup>2)</sup>）地域であった。次章でふれるように、この地方はフランスとドイツの係争の地であり、言語もそうした政治の影響を色濃くうけてきた。その結果、図1にみられるように、アルザスをはじめとする両国の国境地帯には、フランス語とドイツ語の併用地域が広がっている。フレデリック＝オッフエは、ベルギーやスイスでは複数の文明が共存しているのに対して、アルザスではそれらが合流している、と述べている<sup>3)</sup>。この文明という言葉をも、言語といいかえることも可能であろう。

ところで、アルザスをはさむフランスとドイツでは、国家の政治的な統合原理が大きく異なっている。すなわち、フランスがとりわけ革命以降、中央集権国家としての道を歩んだのに対して、ドイツは基本的に連邦国家である。言語に関しても、フランスが国家の言語としてのフランス語を非常に重要視したのに対し、ドイツ語は高地ドイツ語（標準ドイツ語とされる）と低地ドイツ語がいまだに話し言葉では通じないといわれるほど、地方分権的な性格を残している。そうした中においてアルザス語は、フランス語の影響を多少うけたドイツ語の一地方語、と位置づけること

ができよう<sup>4)</sup>。

図2をみると、フランスにおける地域言語の分布は、オイル諸語とオック語によって、大まかに南北に二分される。さらに、正六角形の形状になぞらえられるフランスの国土は、その六角形の頂点のほぼすべてに地域言語をかかえている<sup>5)</sup>。そのうち、ゲルマン系の言語としては、本報告でとりあげるアルザス語のほか、ロレーヌ語（アルザス語と同様にドイツ語系の言語であり、フランク語とも呼ばれる）やベルギー国境地帯のオランダ語系フラマン（フランデレン）語がある<sup>6)</sup>。

地域言語の問題は、それが文化面に限定されればある意味で単純なものにとどまるが、民族的少数派の問題とも絡んで政治性を帯びると非常に微妙な問題に発展する。そして、フランスでいえばコルス（コルシカ）島にみられるように、往々にしてそうなる場合が多い。国境地帯や周縁部に地域言語をもつ人々が住む例は、フランスに限らず、イギリス・スペインなどヨーロッパの多くの国々にみられ、しばしば政治的な問題（いわゆる民族間

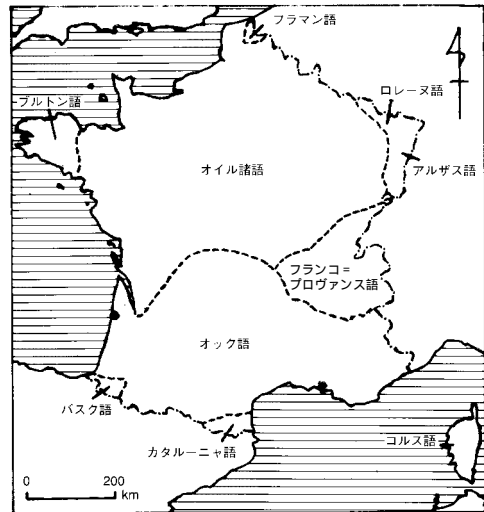


図2 フランスにおける地域言語の分布

（田中（1981），p.80，を一部改変）

注）アルザス語とロレーヌ語の境界は明確にし得ないため、図示しなかった。

題)に発展している。アルザスは、EU統合の要の地に位置する(中心都市のストラスブールはEU議会の所在地である)こともあって、今日、少なくとも表面的には地域言語の政治問題化を免れているように思われる。しかし、アルザス語もまた、底流には微妙な問題を抱えている。

アルザスの言語をめぐる問題は、ブルトン語・コルス語といったフランスの他の地域言語の問題とも重ね合わせられる形で、日本でも数多く紹介されてきた。その代表的なものには、田中克彦の『ことばと国家』<sup>7)</sup>があげられる。また、アルザスの言語問題を通時的に考察したウージェーヌ＝フィリップスの『アルザスの言語戦争』<sup>8)</sup>のほか、アルザスの歴史全般を扱った著作もみられる<sup>9)</sup>。とくに、日本からこのアルザス語の問題に関わる場合、日本における地域言語(例えば、アイヌ語や琉球語(ないし琉球方言))の問題と重ね合わせてみていく視点も重要であろう<sup>10)</sup>。

ここでは、そうした諸研究に学びつつ、まず次章でアルザスの言語についての歴史的な概観を行なう。第 3 章では、1999年に実施された言語調査について紹介し、その結果に対して検討を加える。そして、EU統合の中、アルザスの地域言語がどのような現状にあるのかを考察していきたい。アルザスは度重なる帰属変更のゆえに、さまざまな研究の対象地域とされてきたが、オッフエの言を借りれば、アルザスの諸問題は「ことばに凝縮される」<sup>11)</sup>のである。

### 歴史的展開

フランス語とアルザス語の言語境界を正確に画定することは困難な問題であるが、おおそアルザスの西境をなしているヴォージュ山脈を境界とみることができる。そして、このヴォージュ山脈による言語境界は、おおそ9世紀には確定していたとされる<sup>12)</sup>。その

後、神聖ローマ帝国領となったアルザスではいわゆるドイツ的な文化が開いた。ルネサンスや宗教改革の時期になると、アルザスはその一大拠点となった。

三十年戦争後の1648年に結ばれたウェストファリア(ヴェストファーレン)条約によって、アルザスの大半はフランス領となり、公用語としてフランス語が導入されるようになった。しかし、この段階では、フランス語はあくまで上層階級のものであり、民衆たちの間では、依然としてドイツ語系の言語が幅を利かせていた<sup>13)</sup>。18世紀末期のフランス革命によって、フランス語が国家語の地位を得ると、アルザスでもフランス語が徐々に民衆に浸透し、ドイツ語の後退が起こった<sup>14)</sup>。とはいえ、相対的にみれば、アルザスがドイツ語地帯であることに変わりはない。

1871年の普仏戦争終結によって、アルザスと隣接するロレーヌ地方の大半がドイツ領になり、両地方を合わせてエルザス＝ロートリンゲンという一行政単位となった。このときの状況を領土を失ったフランスの側から描いた作品が、ドーデ(ドデー)の「最後の授業」である<sup>15)</sup>。この作品をめぐるのは、その日本への影響も含めて、数々の論考が行なわれている。そのうち、中本真生子は、「最後の授業」の中でアルザスを去るフランス語教師が「自分の言葉(＝フランス語をさす、筆者注)を話すことも書くこともできないのか!」と語る場面と、同じドーデの「新しい先生」という作品をひいて、そこからアルザスの日常言語があくまでドイツ系アルザス語であったことを読みとっている<sup>16)</sup>。

50年近くに及んだドイツ時代には、当然のことながらアルザスにおけるドイツ語の地位が強化された。この間、ドイツからアルザス・ロレーヌへの移民も進み、1910年の時点では、アルザスの人口約120万のうち、13.1万人がドイツ生まれであった<sup>17)</sup>。こうしたことも、言語的なドイツ化に寄与したと推察さ

れる。

1918年の第一次世界大戦終結にともない、アルザス・ロレーヌが再びフランス領となると、言語政策も一変した。フランスでは、アルザスがドイツ領であった約50年の間に中央集権的な教育政策が推進されてきたため、戦後のアルザスでも、なかば強制的にフランス語が課されるようになった<sup>18)</sup>。また、終戦翌年の1919年には「市町村道路の名称変更命令」が出され、ドイツ的な通りや広場の呼称がフランス語化された<sup>19)</sup>。

1940年にナチ・ドイツがアルザスを占領すると、ドイツ語(方言としてのアルザス語ではない<sup>20)</sup>)はドイツ国民国家樹立のために不可欠な道具となり、徹底した脱フランス政策がとられた。そして、第二次世界大戦が1945年に終わり、アルザスがフランス領に「復帰」すると、ナチ統治への反動から「フランス語を話すのは粹だ」<sup>21)</sup>という言葉に象徴されるような状況が生まれ、アルザス語はドイツ語方言ではない、という主張が数多くあらわれた<sup>22)</sup>。

田中克彦によれば、1910年の時点では住民の94.6%がドイツ語を話していた。その後、フランス語化が進展するが、1962年においても、フランス語使用者が住民の78.8%であったのに対して、アルザス語使用者が87.5%、標準ドイツ語使用者が63.6%となっており、「おおざっぱに言ってドイツ語を話すの方が多し」状況であった(二言語・三言語を同時に話せる住民が多いため、パーセンテージの合計は100%をこえている)<sup>23)</sup>。

図3は、アルザスのある2家系を例にとって、それぞれの家庭内での使用言語を示したものである<sup>24)</sup>。これによると、第一次世界大戦以前に生まれた世代(図中の第1～第3世代)では、もっぱらアルザス語が用いられ、フランス語は用いられたとしても副次的なものであった。しかし、世代が進むにつれ、他地域からの転入の影響もあって、徐々にフランス語や他言語が浸透していったことがわかる。

こうしたアルザス語の危機に直面して、アルザス語を守ろうとする動きが起り、アルザスの文化的独自性を保持するために、二言

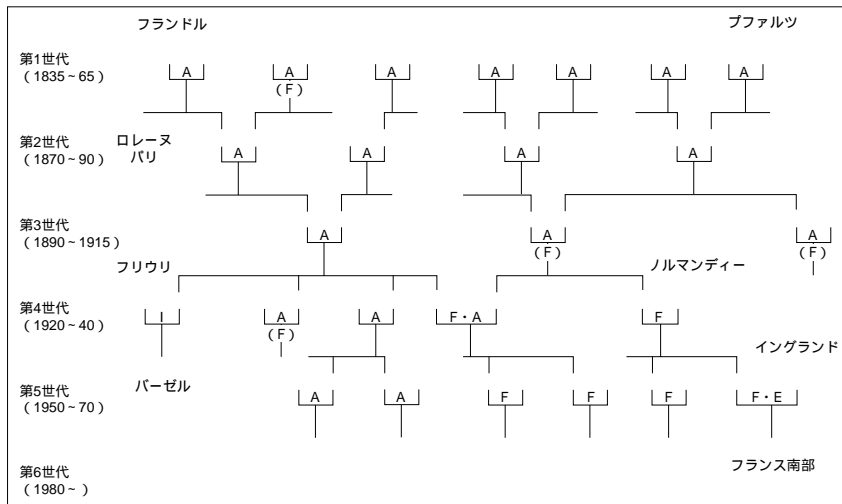


図3 家庭で話されていた言語 (TABOURET-KELLER(1995), p.158, を改変)

注1) = 男性, = 女性, A = アルザス語, F = フランス語, I = イタリア語, E = 英語。

2) ( ) 内は副次的にその言語が話されていたこと, ・で結びつけたものは両言語の併用を示す。

3) 現在、プファルツはドイツ領、フリウリはイタリア領、バーゼルはスイス領。

語併用主義の確立が唱えられるようになった。具体的には、学校におけるアルザス語教育の実施や、新聞・テレビなどでの二言語併用の推進などが目標とされている<sup>25)</sup>。また、アルザス言語・文化事務局 Office pour la Langue et la Culture d'Alsace や、バイリンガル地域事務局 Office Régional du Bilinguisme といった機関も設立されており、アルザス語の普及活動が行なわれている。

### 1999年の言語調査にみるアルザス語

#### (1) 調査の概要

前章まで述べてきたように、従来、フランスでは中央集権的な言語政策が伝統的であった。しかし、近年、コルス（コルシカ）島の自治権獲得運動などの影響を受け、以前よりも地域言語を見直そうという動きがみられるようになってきた。

そのような流れの中、国立統計経済研究所（略称 INSEE）は、1999年に「家族史の調査」を全フランス規模で行ない、約38万人から回答を得た<sup>26)</sup>。調査内容は、家族構成や結婚・職業など多岐にわたるが、その一部が言語面の項目となっている。そこでは、「家庭における言語の伝達」に焦点があてられており、回答者が5歳のときにその親が話していた言語と、回答者の子供が5歳のときに回答者自身が話していた言語、および現在回答者が用いている言語について質問がなされている。地域言語の事情を考慮し、アルザス・ロレーヌ・フランドル・ブルターニュ・コルスの各地方と、バスク語・カタルーニャ語の使用地域では、サンプル数が多めにとられている。近年のフランスでこれだけの規模の言語調査が行なわれたことはなく、20世紀の間に地域言語がどのような変容を経てきたかを考えるための好材料である。

全体的にみると、回答者の親がフランス語以外の言語（地域言語のほか、いわゆる外国

語も含む）を用いていた割合は、回答者の世代と連動している。すなわち、1930年以前に生まれた世代では、その親が約3分の1の割合でフランス語以外の言語を話していたのに対し、1970年代生まれの場合にはその割合が約5分の1に低下する<sup>27)</sup>。これは、フランス語におされる形で、家庭内における地域言語の伝達が活発でなくなってきたことを意味する。親と地域言語で話していた人の割合は、1930年以前に生まれた世代で約4分の1であったのが、1970年代生まれではわずか20分の1程度となっている<sup>28)</sup>。

#### (2) アルザス語と他の地域言語

図4は、親がフランス語以外の言語を話していたと答えた回答者に対して、どの言語を用いていたのかを質問し、サンプルから実数を割り出して地域言語ごとに示したものである。このグラフによると、「日常的」に話していた人数（グラフA）が最も多い地域言語がアルザス語であり、その数は66万人に達する。両親がともにアルザス語を用いていた割合も高く、それだけアルザス語が日常に根付いていたことがうかがえる。この66万人という数字は、「時々」話していた（グラフB）と答えた24万人の3倍近くに達しており、副次的に用いていた人の方が多いオック語やオイル諸語のグラフと対照的である。グラフA・Bの形において、アルザス語に似ているのはロレーヌ語やバスク語であるが<sup>29)</sup>、その使用人口はアルザス語よりもはるかに少なかった。

また、回答者が自分の子供に地域言語を伝えたかという質問に対しても、アルザス語は最も高い値を示している（グラフC）。その結果、図5にみられるように、他言語（主としてフランス語と考えられる）による侵食率は47%と、地域言語の中で最も低くなっている。これに続くのはバスク語（58%）とコルス語（66%）であり、それぞれの地域がもつ独自性の一端を示すものといえる。一方、フラン

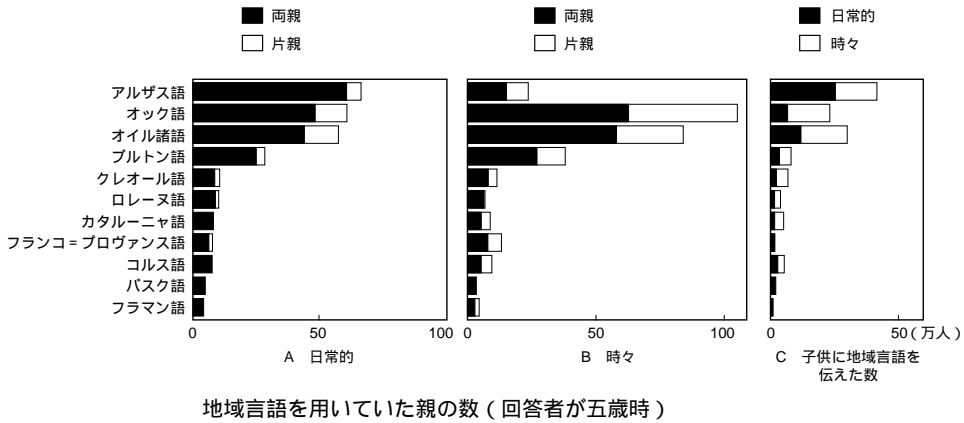


図4 地域言語の受容と伝達 (HÉRAN, FILHON et DEPREZ(2002), p.2, による)  
注) クレオール語は, フランス語と他言語との混成語。

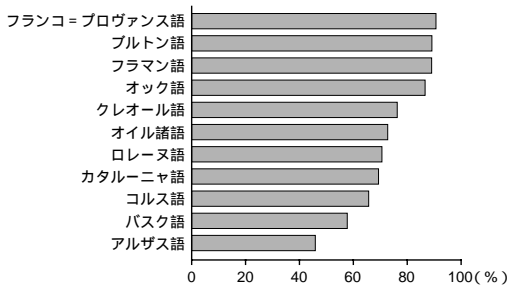


図5 他言語による侵食率  
(HÉRAN, FILHON et DEPREZ(2002), p.3, により作成)  
注1) 本図のカタルーニャ語にはガリシア語を含む。  
2) 侵食率の説明は本文の注30)を参照。

コ=プロヴァンス語の場合, 侵食率が90%に上っており, 地域言語が子供にほとんど伝えられていなかったことがわかる<sup>30)</sup>。

この調査による現在のアルザス語使用人口(成人)は, 54.8万人と推計されており, フランスの地域言語の中で最も多い。以下, オクシタン(オック)語(52.6万), ブルトン語(30.4万), オイル諸語(20.4万), カタルーニャ語(13.2万), コルス語(12.2万), ロレーヌ語(7.8万), バスク語(4.4万)と続いている<sup>31)</sup>。

しかし, 世代が下るにつれて地域言語を伝える割合が減る点に関しては, アルザス語も例外ではない。図6は, アルザス語・ブルト

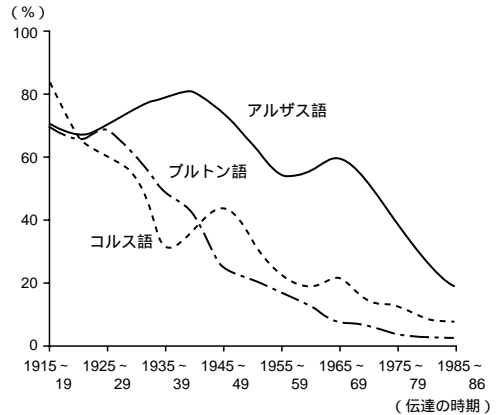


図6 地域言語伝達の推移  
(HÉRAN, FILHON et DEPREZ(2002), p.4, による)

ン語・コルス語について, 5歳時に地域言語を伝えられた割合を年代ごとにあらわしたものである。ここでもアルザス語は最も高い比率を示しているが, その割合の低下という点では, 他の言語と相似形を描いている。1915~19年に子供であった人の場合, アルザス語が伝えられた割合は70%であった。それが, 近年では18%にまで低下している<sup>32)</sup>。第二次世界大戦中, アルザスはドイツ領であったためにアルザス語伝達の割合も高くなったが, その後は低下に転じており, とりわけ近年は低落傾向が著しくなっている。

(3) アルザス語の現状

この言語調査に関するアルザスに的を絞った分析として、マリー・オード＝ル＝ガン Marie-Aude LE GUENの報告がある<sup>33)</sup>。本節では、この報告の内容に基づき、数字をあげながら、アルザス語の現状をみていく。

アルザスでこの調査に回答を寄せたのは、1999年に19歳以上であった28,895人である。同年のアルザスの人口(19歳以上)は約129万人であり<sup>34)</sup>、サンプルの比率は約2.2%となる。ル＝ガンは、年齢・職業・居住地などの諸点から、このサンプルの有効性を検証している<sup>35)</sup>。

出生地

表1は、アルザス語およびフランス語が伝えられた割合を、回答者の出生地ごとに示したものである。回答者がアルザス生まれの場合、当然のことながらアルザス語が伝えられた割合は高くなり、アルザス語のみという回答が3割あるほか、何らかの形でアルザス語が伝えられた割合はほぼ4分の3に達する。一方、フランス語のみという回答は少なめであるものの、フランス語が伝えられた割合も6割に達しており、該当者の半数近くが両言語を伝えられたことがわかる。

アルザス以外のフランスを出生地とする場

合、この数字は大きく変化する。フランス語のみという回答が3分の2以上を占め、4分の3以上の人がフランス語を伝えられている。逆に、アルザス語が伝えられた割合は、フランス語との併用を含めても、15%弱にとどまっている。

外国生まれの人の場合は、フランス語・アルザス語以外という回答が半数近くを占めている。しかし、アルザス以外のフランス生まれの場合と比較したとき、フランス語の割合が著しく低下する中で、アルザス語の割合が微増していることは注目に値する。これは、アルザスで日常生活を送る上で、アルザス語が一つの生活手段となっている(あるいは、なっていた)ことをうかがわせる数字である。

以上のように、出生地によってアルザス語の使用割合は大きく異なっており、とりわけアルザスで生まれ育ったか否かがその伝達を規定していることがわかる。このことから、ル＝ガンは、アルザス語が「家庭の言語」であると指摘している<sup>36)</sup>。アルザス住民のうち、アルザス生まれの割合は、1962年の84.0%から漸減し、1999年には73.6%となっている<sup>37)</sup>。アルザス語の衰退の一因には、外国人を含めたこうした外来住民の増加があげられよう。

年齢・職業・居住地

前節でも述べたように、時代が下るにつれ

表1 出生地別にみたアルザス語伝達の割合(%)

伝えられた言語	出生地			計
	アルザス	フランス (アルザス除く)	フランス以外	
フランス語のみ	16.6	66.8	15.5	25.2
フランス語、ときにアルザス語	15.9	5.1	3.9	12.1
ときにフランス語、通常はアルザス語	28.5	4.8	5.7	20.8
つねにアルザス語、フランス語なし	30.0	4.4	5.5	21.6
フランス語・アルザス語以外	0.7	3.2	48.6	8.7
その他	8.3	15.7	20.9	11.6
計	100.0	100.0	100.0	100.0

(LE GUEN(2002), p.24, 29, 30, により作成)

て、アルザス語など、地域言語の使用割合は低下してきた。現在、日常的にアルザス語を話しているか、という質問に対する回答を世代ごとに示したのが表2である。第二次世界大戦以前に生まれた人の場合は、今でも過半数がアルザス語を使用しているのに対し、調査時に20歳代の世代ではその割合が3割に満たなくなっている。受容した言語の推移(図7)をみても、かつて50%近くあったアルザス語のみ(フランス語なし)の割合が急落し、フランス語のみ、ないしフランス語が主体と

いう割合が増加し続けていることが読みとれる<sup>38)</sup>。

職業との関連では、アルザス語を用いている割合が最も高いのが農民(62.4%)で、その過半数をこえている。次に続くのは、職人・商人・企業主(44.1%)で、従業員や労働者が40%前後である。一方、アルザス語の使用割合が最も低いのは労働経験なし(32.3%)で、若年層にあたるとみられる。ほかに、自由業・管理職(34.8%)も比較的低くなっている<sup>39)</sup>。この数字は、大衆(カトリック教徒が多い)がアルザス語に愛着を抱いている<sup>40)</sup>、とする従来の指摘と一致する。

アルザス語使用割合を居住地別にみると、村落部が48.0%と最も高く、人口2万未満の都市部で43.3%、人口10万未満の都市部で34.7%となる。そして、人口10万以上の都市部(ストラスブール・ミュルーズ周辺)では、31.3%と最も低くなっている<sup>41)</sup>。

以上のことから、ごく単純化していえば、古く村落的なアルザス語と、新しく都市的なフランス語という構図を確認することができよう。

#### (4) 考察

1999年の言語調査について、いくつかの報

表2 現在、アルザス語を話す人の割合(%)

出生年代	アルザス語を話す割合
1920～24	52.1
1925～29	53.6
1930～34	51.2
1935～39	50.1
1940～44	47.3
1945～49	40.8
1950～54	40.4
1955～59	38.5
1960～64	36.8
1965～69	32.7
1970～74	27.0
1975～80	20.7

(LE GUEN(2002), p.33, による)

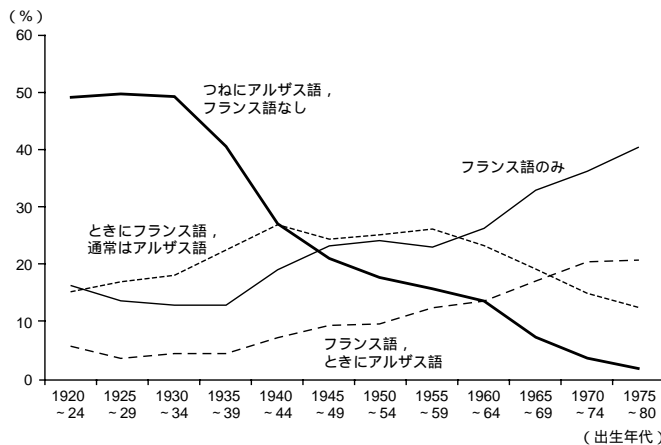


図7 アルザス語・フランス語受容の推移 (LE GUEN(2002), p.27, による)



告をもとに述べてきた。ここでは、EU統合という現状の中、フランスの諸地域言語の中でなぜアルザス語が相対的に保持されているのか、という点に関して、若干の考察を加える。

手塚 章によれば、アルザスでは、1980年代以降、越境通勤者、すなわち国境を越えたドイツやスイスへの通勤者が急増しており、1999年にはその数が約7万人に達している（アルザスの全労働人口に占める比率は8.5%）。その中には、ドイツからアルザスに引っ越してきたドイツ国籍者が5,400人含まれている<sup>42)</sup>。国境での検問を廃止した1995年のシェンゲン協定発効に合わせるように、アルザスとドイツとの密接度が高まっていることが分かる（写真1の中央に見える国境の検問所は、現在使用されておらず、自由に通行できる）。

また、国境を越えた地域間の連携組織も組織されつつある。アルザス地域圏国際協力・交流局長のピエール＝メイヤー Pierre MEYER 氏のご教示によれば、フランス・ドイツ間の交流会議の際、それぞれフランス語・ドイツ語で話すが、その内容はお互いに理解できるという。

このほか、買い物など日常生活面も含め、アルザス語ないしドイツ語を話せる、あるいは話せないまでも理解できるということは、交流が緊密になればなるほど必要性が高くなってくるといえる。つまり、アルザス語ない



写真1  
ストラスブールのドイツ側国境（2002年7月撮影）

しドイツ語を話すことが、経済的な有利性と結びつくことになり<sup>43)</sup>、一概にアルザス語を古いものと決めつけるわけにはいなくなる。

メディアの面でも、地域言語で放送・出版されるものが増えつつあるほか、アルザスでは、国境地帯に位置することの意味がきわめて大きくなっている。1991年の調査によれば、住民の3分の2がドイツ・スイスなどのドイツ語テレビを見たことがあると答えている<sup>44)</sup>。定期刊行物の15%がフランス語・ドイツ語のバイリンガルであり、ドイツやスイスから流入する分を合わせると、アルザスはフランスの中で最も「非フランス語的」な地域であると指摘されるほどである<sup>45)</sup>。

#### むすびにかえて

フランス語と地域言語の関係を、一段階上げて考えてみると、国際社会で幅を利かせつつある英語に対して、フランス語の地位をどう守っていくか、という問題に行き着く。フランスが、EUの中で、あるいは世界に対して多言語主義を掲げる背景には、言語の多様性を保つことが、フランス語の影響力の維持につながる、という思惑がある<sup>46)</sup>。

多言語主義の文脈で考えれば、フランス国内における地域言語の重視は当然の成り行きであるはずで、実際、そうした地方分権的な政策もとられつつある。しかし、長らくフランスで主流であった中央集権的な考え方も依然として根強い。ECからEUへの衣替えを定めたマーストリヒト条約の批准に際して、フランスでは1992年に憲法改正が行なわれ、「共和国の言語はフランス語である」という項目が追加された<sup>47)</sup>。また、欧州地域語少数言語憲章の批准をめぐっても、フランスは単一言語主義と多言語主義の間を揺れ動いた<sup>48)</sup>。

アルザス自体も、そのアイデンティティーを地域・国家・EUのどこに求めるかについて、矛盾を抱えている。マーストリヒト条約

批准をめぐる国民投票では、アルザス住民の7割近くが賛成票を投じ、EU統合への高い期待感を示した。この結果をみれば、EU議会の位置するアルザスは、フランスという国を飛び越えて、ヨーロッパと直接結びつこうとしているようにも見える<sup>49)</sup>。だが、その一方で、移民排斥を唱える右翼の国民戦線への支持率がアルザスで高く、国家を重視する人々が少なからずいることも事実である<sup>50)</sup>。

ここ150年ほど、アルザスは幾度か国境の変遷に見舞われた。その間、単に地図上で国境線が動いたにとどまらず、国境がもつ意味も時代とともに変容してきた<sup>51)</sup>。国境が開放的になり、地域・国家・EUという三層構造ができつつある中で、かつてフランスにとってのいわば敵性言語であったアルザス語は、新たな時代を迎えようとしている。前章の調査結果でもみたように、アルザス語はフランスの他の地域言語に比べると、その存続の条件に恵まれているといえる。とはいえ、フランスという国の中でドイツ語系のアルザス語が生き残っていくことは、必ずしも容易なことではない。現在、アルザス語ないしドイツ語が話せることがもつ経済的有利性も、徐々に英語にとってかわられる可能性がある。

生き残るための方策の一つには、フランス国内、あるいはヨーロッパ域内の他の少数派言語との連携があげられる。EUが発行した地域言語用のCD-ROMには、アルザス語のほか、ウェールズ語・バスク語・カタルーニャ語・ガリシア語が収録されている。フランス国内においても、他の地域言語で行なわれているさまざまな使用推進運動との連携がはかられている。

写真2は、近年ストラスブール市内に開通した路面電車の駅名標である。上下いずれも「旧ワイン市場」を意味し、上のアルト=ヴィンメリック Alt Winmàrikがアルザス語名、下のヴィユ=マルシェ=オ=ヴァン Vieux Marché aux Vinsがフランス語名である。フランス語



写真2  
ストラスブール市内路面電車の駅名標  
(2002年7月撮影)

ではなく、アルザス語が先に書かれているところに、地域意識を読みとれる<sup>52)</sup>。この写真や、図1・図7にみられるように、アルザス語が存続するとすれば、フランス語を排除した形ではなく、アルザス語とフランス語の二言語併用の形であると考えられる。やや楽観的にいえば、このように他言語にも開かれた形で自分たちの言語を使おうとする模索の地道な積み重ねが、地域言語や、それを含めた地域文化の保持への道を切り開いていくのであろう。

#### 付記

本報告は、2002年度科学研究費補助金（海外学術調査）「フランス・ドイツ国境地帯における地域統合の空間動態」による成果の一部である。研究代表者の筑波大学地球科学系、手塚 章先生をはじめとする調査メンバーの皆様からは、さまざまな形で有益なご助言をいただきました。また、現地調査にあたっては、アルザス言語・文化事務局やINSEEアルザス事務局をはじめ、多くの諸機関のご協力を得ました。以上、記して深く感謝申し上げます。

なお、本報告の第 章・第 章は、三木一彦（2003）：「アルザスにおける言語の展開と現状」、手塚 章編『フランス・ドイツ国境

地帯における地域統合の空間動態』,平成13年度・14年度科学研究費補助金(基盤研究(B)(2))研究成果報告書,pp.35~41,を加筆修正したものである。本報告の骨子は,2003年10月の日本地理学会秋季学術大会(於:岡山大学)で発表した。

注

- 1) 言語と地名表記の問題は微妙なものを含んでおり,フランス語読みの「アルザス」Alsaceをとるか,ドイツ語読みの「エルザス」Elsassをとるか,厳密に言えば十分に吟味せねばならないところである。本報告では,アルザスがフランスの領土である現状に鑑み,アルザスの地名・機関名については基本的にフランス語表記を用いることとする。同様の理由で,「コルシカ」Corsicaではなく「コルス」Corseを優先する。
- 2) 細かくいえば,アルザスの北部と南部では言語に地域差がある。また,アルザスには,地域言語地帯の中の少数言語ともいえるユダヤ=アルザス語なども存在している。前者の点については,田中克彦(1981):『ことばと国家』,岩波新書,p.123。後者の点については,鶴巻泉子(2000):『地域語と地域メディア - ブルターニュとアルザスの比較 -』,ことばと社会4,p.48。
- 3) フレデリック=オッフエ著,宇京 頼三訳(1987):『アルザス文化論』,みすず書房,pp.188~189。
- 4) 前掲3),pp.29~30。
- 5) Terry G. JORDAN-BYCHKOV and Bella Bychkova JORDAN(2002): *The European Culture Area - A Systematic Geography* - (4th Edition), Rowman & Littlefield, p.198。
- 6) 原 聖(1997):『フランスの地域言語』,三浦信孝編『多言語主義とは何か』,藤原書店,pp.82~85。
- 7) 前掲2),218p。
- 8) ウージェーヌ=フィリップス著,宇京 頼三訳(1994):『アルザスの言語戦争』,白水社,333p。
- 9) 市村卓彦(2002):『アルザス文化史』,人文書院,488p。ジャン マリ=マユール著,中本真生子訳(2002):『アルザス - 国境と記憶 -』,ピエール=ノラ編,谷川 稔監訳『記憶の場 - フランス国民意識の文化 = 社会史 - 1 対立』,岩波書店,pp.435~466。
- 10) こうした視点からアルザス語を描いたものとして,以下の2つの文献があげられる。前掲2),pp.107~128。中村 敬(1990):『最後の授業』についての覚え書き - 三つの解釈をめぐって -』,成城文藝133,pp.107~123。
- 11) 前掲3),p.252。
- 12) 前掲8),pp.15~16。
- 13) 前掲8),pp.23~38。
- 14) 前掲8),p.94。なお,フランス革命期のアルザス語をめぐる状況については,天野知恵子(1991):『フランス革命期の方言言語問題』,紀州経済史文化史研究所紀要11,pp.83~101,に詳しい。
- 15) ドーデー著,桜田 佐訳(1936):『最後の授業』,同上著『月曜物語』,岩波文庫,pp.11~17。
- 16) 中本真生子(1998):『アルザスと国民国家 - 「最後の授業」再考 -』,思想887,pp.54~74。
- 17) 渡辺和行(1997):『アルザスとエルザス - ナシオンとフォルクのはざままで -』,香川法学16-3・4(合併号),p.12。
- 18) 前掲8),p.142。
- 19) 前掲9),p.366。
- 20) 前掲9),p.403。
- 21) 前掲9),p.429。
- 22) 前掲3),p.29・78。および,前掲2),pp.26~28。
- 23) 前掲2),p.124。
- 24) Andrée TABOURET-KELLER(1995): *Langues en contact dans des situations linguistiquement focalisées*, Jean-François P. BONNOT ed., *Paroles régionales - normes, variétés linguistiques et contexte social* -, Presses Universitaires de Strasbourg, pp.139~161。
- 25) 前掲9),pp.454~455。なお,教育に関しては,アンリ=ジオルダン編,原 聖訳(1987):『虐げられた言語の復権 - フランスにおける少数言語の教育運動 -』,批評社,245p,メディアに関しては,前掲2),pp.24~50,に詳しい。
- 26) Francine CASSEN, François HÉRAN et Laurent TOULEMON(2000): *Étude de l'histoire familiale - L'édition 1999 de enquête Famille -*, *Courrier des statistiques* 93, pp.25~37。これには,調査票の全文も収録されている。なお,この言語調査は,

- 地域言語だけでなく、外国語（例えば、アラビア語・ポルトガル語）の調査も含んでいる。
- 27) François CLANCHÉ (2002) : Langues régionales, langues étrangères: de l'héritage à la pratique, *Insee première* 830, pp.1 ~ 2 .
- 28) 前掲27), p.3 .
- 29) François HÉRAN, Alexandra FILHON et Christine DEPREZ(2002) : La dynamique des langues en France au fil du XX<sup>e</sup> siècle ,*Population et société* 376 , p.3 .
- 30) 同上 . アルザス語を例にとって侵食率を説明すると、5歳時に親がアルザス語を日常的に話していたと答えた回答者のうち、自分の子供にはアルザス語を日常的に話していなかったと回答した人が47%あり、その分だけ世代の間に地域言語の伝達が行なわれなくなったことを示している .
- 31) 前掲29) , p.4 .
- 32) 同上 .
- 33) Marie-Aude LE GUEN(2002) : *La pratique et la transmission de l'alsacien en Alsace* , Rapport de Stage Maîtrise MASS année 2001-2002 (Université de Nice Sophia Antipolis - UFR Sciences) , 37p(本文部分のみ) .
- 34) 前掲33) , p.16 .
- 35) 前掲33) , pp.17 ~ 22 .
- 36) 前掲33) , p.32 .
- 37) 前掲33) , p.26 .
- 38) 前掲33) , pp.26 ~ 27 .
- 39) 前掲33) , p.33 .
- 40) 前掲3) , pp.48 ~ 49 .
- 41) 前掲33) , p.34 .
- 42) 手塚 章(2003) : 「ヨーロッパ中軸国境地帯における空間組織の変容 - アルザス・ロレーヌ地方を中心として - 」, *人文地理学研究* 27 , pp.38 ~ 39 . なお、越境通勤者は、とくにアルザスの北部に多い . 歴史的にみても、フランス語が南部に、アルザス語が北部により浸透しているように、アルザス北部はドイツとのつながりがより深いといえる . 前掲3) , p.95 .
- 43) 宮島 喬(1996) : 「コルシカとアルザス - ヨーロッパ統合下の民族地域の統合と分化 - 」, *思想* 863 , p.58 .
- 44) 前掲2) , p.28 .
- 45) 前掲6) , p.90 .
- 46) 三浦信孝(1997) : 「一にして不可分なジャコバン共和国と多言語主義」, 前掲6) , pp.76 ~ 77 .
- 47) 三浦信孝(2001) : 「フランスはどこへ行く? - グローバル化・欧州統合・移民問題に揺れるジャコバン共和国 - 」, 同上編『普遍性が差異か - 共和主義の臨界, フランス - 』, 藤原書店, pp.20 ~ 22 .
- 48) 三浦信孝(2001) : 「共和国の言語, フランスの諸言語 - 言語の多様性と言語権の政治哲学 - 」, 前掲47) , pp.217 ~ 236 .
- 49) 前掲43) , pp.60 ~ 62 .
- 50) 前掲43) , p.59 .
- 51) アルザスを起点に、国民国家からEU統合への流れを歴史的にとらえたものとして、例えば、谷川 稔(1999) : 「序」, 谷川 稔・北原 敦・鈴木健夫・村岡健次『世界の歴史22 近代ヨーロッパの情熱と苦悩』, 中央公論新社, pp.11 ~ 21 , があげられる .
- 52) 地名表示と地域言語の関係については、原 聖(1999) : 「少数言語の権利としての街頭地名表示 - ウェールズとブルターニュの事例から - 」, *ことばと社会* 1 , pp.6 ~ 22 , がある .